# 小名浜ストーリー・西舘好子

文圓社

# 名浜ストーリー・西舘好子

文園社

〈著者紹介〉
西舘好子（にしだて　よしこ）
1940年10月5日，東京・浅草で生まれる。
1982年劇団こまつ座を主宰。1986年第20回紀伊国屋演劇賞団体賞を受賞するなど，演劇プロデューサーとして活躍。1987年8月㈱リブ・フレッシュ設立。現在女性問題評論家，エッセイスト，演劇プロデューサーなど多方面に活躍中。主な著書に『はみだし家族の事情』『はみだし女房の夫婦学』（以上光文社），『さよなら学校』（講談社），『愛がなければ生きて行けない』（海竜社），『いま二幕目』（毎日新聞社）などがある。
連絡先・株式会社リブ・フレッシュ
〒130 東京都墨田区両国4—32—16両国プラザ602 電話 03—633—6890

昭和六十三年十一月二十八日　初版発行
著者——西舘好子
発行者——中島響子
小名浜ストーリー
定価　一二〇〇円
発行所——株式会社　文園社
東京都文京区本郷四—十二—十六—516
電話・東京〇三(八一六)一七〇五　〒一一三
印刷所——中央精版印刷株式会社

©1988　西舘好子　ISBN4-89336-043-4 C0095

# 小名浜ストーリー・目次

一番列車に乗って――5
ガリバーの国から――8
夕焼けこやけで……――20
ばあよとじいよ――28
我は海の子――33
ナイトショウ――40
ばっちゃとおばあちゃん――50
よでさん――59
学校ごっこ――63
ご先祖様――68

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マドロス――80
みかんの花咲く丘――80
叔父と禅問答――85
砂まじりのなんこう――90
モッケヤミ――95
カネジョのオンチャン――100
ボテフリ――109
かじめめし――113
おたすけじいさん――119
夜汽車と火の玉――124

赤子のへその緒 129
下町気質 134
かもじ屋さんの先物買い 139
大震災 147
星に願いを 152
今日は昨日のつづき 160
あとがき 164

切り絵　成田　徹

装丁　岡村元夫

# 一番列車に乗って

白い花模様のサッカー地のワンピースの裾は、たっぷりのフレアーが入っている。広いつばの麦わら帽子には、長いレースのリボンとひまわりの造花が飾られている。バスケットの中身は、汽車の中で編むつもりのリリアン、森永キャラメル、それに母の鏡台の引きだしからぬき出した白粉紙などが大切におさめられている。

一番列車は五時、前夜はうれしくてよく眠れないまま飛び起きて、父に送られて上野まで行く。

うす紫の朝もやの中、空き地の赤土の雑草は伸びに伸び、風にゆれている。あちこちにニョキニョキ建ちならんだバラックからは、もう人の出入りがはじまっているようだ。

田舎ではたっぷり遊んでくるように、ただし、海では足の立たないところには行かないよう、お小使いはいっぺんに使わず計画的に使うよう、皆には小理屈をいって嫌われないよう、父は細々注意をしながら歩くが、わたしは、ほとんどスキップをしていて聞いてなどいない。

駅では、父に土瓶に入ったお茶とお弁当を買ってもらう。
国防服にゲートルを巻いている父は、戦時中の習慣が抜けないまま、その足で浅草の聖天町にある仕事場まで歩いて行くつもりでいる。
汽車は定時に発車、蒸気機関車だから、しじゅう煙を吐きつづける。
窓から顔を出すと、黒いすすが一面についてしまうから座席は走る方向とは反対の席に座った方がいい、なにより行儀よくしているに限るのだと母に教わってきたが、やはり、早朝の風は涼気をおびていて気持ちがいい。ついつい風をうける方に席をとる。
陽が上がれば容赦なく照りつける熱とぎっしりの乗客の混みようで、車中はまるで蒸し風呂のよう。風は汗をまぜて車中を吹きぬける。
誰もがやたら大きな荷を抱えこんでいるし、疲れきっている。
頭上の網棚は、リュックサックや風呂敷包みでぎっしりといっぱい、汽車の揺れでボタッと頭上におちてきたりする。
通路には、新聞紙を敷いて寝ころぶ人もいるし、荷を背にしてぼんやりして体を休めているかつぎ屋のおばさんもいる。
土浦でアイスクリームを買う。
口の中が甘く冷たくシアワセな気持になって、こぼさないように大事に食べる。食べ終わって小使い帳に二十円の出金を書きとめていると、手拭でほっかぶりしたかつぎ屋のお

ばさんが地べたから、
「かしこいね」
とほめてくれた。鉛筆は香水鉛筆でいい香りがしたからおばさんの気でもひいたのだろうか。それから、おばさんはいろいろな質問をわたしにし始めた。
「洋服は誰が縫ったの」
「どこから来たの」
「そしてどこに行くの」
「姉妹はいるの」……など、たわいのない質問である。
わたしは、母がいかに器用で、父は天下一子煩悩で、姉妹はどんなに仲よく遊んでいるかなどを話す。
話していることは夢である。母は器用には違いないが、姑との戦いでしじゅういらいらしていたし、父は次から次に復員してくる友人や知人の世話に追いまくられていた。
姉は、やたら虚弱で内気ときていたし、妹は、チビすぎてあてにもなりゃしない。
「夏は疎開で行っていた海で暮らすの。ばっちゃが食堂をしているし、おじいちゃんは船を持っているの」
「あんたお大尽の家の子なの。いいねえ、わたしんちは守谷というところで染め物をしているけど、まだ父さんは戦争から帰って来ないし、帰ってくるのや来ないのやら分からな

いよ。あんたぐらいの子供もいるけどみんなで大きなカメをね、毎日磨いたり洗ったりしているのよ。帰ったらそのカメの中で布を染めるの、すぐ仕事できるように用意しているけど、このご時世ではね。家族がみんな揃っている人は一番幸せなのよ本当に。戦争なんて何でしたのだろうね、まったく」

おばさんの話は水戸まで続いた。

このころの大人の話は戦争に始まり戦争に尽きた。飽きることがまるでないのは、話している当人たちだけである。

何年も口にできず、胸の内におさめていたことが溢れ出るように、次から次と話は尽きることがなかった。

誰もが壮大で悲壮な大ドラマを演じたのだから仕方がないが、子供にとっても一人一人がヒーローやヒロインをつとめたのである。

## ガリバーの国から

昭和二十一年九月、わたしは父方の祖母と二人で疎開先の小名浜から帰京した。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

祖母の荷は、ぼろの袋に米を、わたしは背に先祖の位牌をしょっての帰京である。
上野からの道すがら、焼野原には一面のコスモスが風にゆれ、おにやんまがすいすいと空を舞っていたのをおぼえている。
わたしと祖母は、帰京して数日間は家の地下に掘った防空壕の穴うめに精出した。
戦争がはげしくなる前は、皆でこの中に入ったのである。
思えば、何メートル下に逃げたところでどうなるものでもなかったのだ。
「無駄なことばかりして」
祖母は毎日、一人でぷりぷりおこりながら土をはこんでいた。
その時家族はまだ疎開先に残り、父は、英語のＡＢＣも知らないのに小名浜で通訳をしていた。
父は、終戦まで東京の家を一人で守っていたが、終戦と聞いて総国民は神社で切腹をしなければならないという町会の人達の結束を蹴って、妻子のいる疎開先にすっとんで行ったのである。
〝非国民、国民の恥〟
という罵声を背中に聞いて、父は黙って汽車に乗った。
「戦争が終わったのに、わざわざ死ぬことはあるまい」
というのが父の考えで、しかしそうなると、逆に冷静さに対抗して激情的に興奮する人

もいたようだ。
日の丸と鉢巻きを持って何時に鳥越神社に集合、という町会からの血書がまわり、むろん父は、そんなものを無視して、
「あたしは妻子がいますので」
と、ことわったが……。
小名浜で船と食堂をもっていた祖父は、すぐ進駐軍に組み入れられていた。
なにしろ、たくさんの兵隊の胃袋を満たさなければならない。
食堂はフル回転し、その縁故で父はすぐに進駐軍に就職が決まったのである。
体の弱い姉が、もう一年で小学校を卒業する。生まれたばかりの妹もいた。
母も一段落してから東京に帰ろうと決めていたので、他国で早々と決まった就職は、一家にとってめでたいばかりであった。
ところが、ひょんなことで父の配属が通訳という部署だったのである。
「あたしゃもともとイングリッシュの素養があったからねえ」
後年、人に聞かれるといつもそう答えていたが、ＡＢＣさえ知らない父がどう通訳をやってのけたかは未だに不明である。
イエスとノーとの使いわけがキーポイントだったのだろうか、器用な質だから画をかいてどうにか用を足したのだろうか、そのあたりは全く見当がつかない。

とにかく、進駐軍の仕事についていれば食いっぱぐれがないというだけでも家族にとってはありがたいことだったが、わたしは失敗して殺されやしないかといつも心配だった。少し英語ができる同僚は、次々に県外追放になったというから、物資をだまって持ち出したり横流しができる仕事場だったのだろう。

英語のできない父は、当然悪事すら思いもつかないのが幸いだった。軍に見つかれば二十四時間以内に県外に家族をつれて出ていくよう命令が下りる。

父は、その用紙を届けるのがほんとうに嫌だったという。

けれど、無視して居続ければ、その場で銃殺である。

着のみ着のままで泣き泣き出てゆく同僚の行方は誰も知らない。

もとより便りも厳罰であった。

父は、なぜか米兵には可愛がられたようである。もともと必死になるという性格ではないのだ。洒落や冗談が好きでいつもにこにこしていた。

笑顔は万国共通語が父の口ぐせでもあった。

こばなしをしてやったり、歌舞伎のこわいろなど教えてやったりしたというから、米兵は毒気をぬかれたのだろう。

父は、米兵のやり方をすぐのみこんだ。欲しい時はあれが欲しいと正直にいえば、彼等は、OKと二つ返事でなんでも調達してくれた。

毛布も罐詰もドロップもＤＤＴもである。
とりわけ、落下傘はどれほど重宝したことだろう。
広い大きな正絹の落下傘は、バイヤス仕立てにできている。母は、部屋中いっぱいに拡げて家族中の者の洋服や布団をつくった。
正絹はすぐ黄ばむので、草や染粉で染めたりしぼりにしたり、作りをピンタックにしたりと工夫もしていた。外に干せば盗まれるので家中に拡げてわたし達はその下で眠った。
みなに見せびらかしたくてわたしはよく友達を軍需工場の跡地に集合させて、母の留守に家の中を見せた。
どの子も律儀でぬか漬けの中から古漬けになった茄子や白瓜を、ぽくぽくに茹でたかぼちゃなどを手土産に持ってくる。
かわりにわたしは、セロファンにひとつずつ包まれた宝石のような色とりどりのドロップを渡す。物々交換である。
彼らがドロップのセロファンを唇にはって音を出して楽しんでいる間、わたしは、茄子の中身をくりぬいて水を入れて遊ぶ。たわいのない遊びの後はほとんど浜に行ってたむろしていた。
浜には外国人がたくさんいた。
船は次々と港に入り、帰還兵や傷病兵をどんどん本国に送り返していたのである。

どこにこれほどの数の外国人がいたのだろうと思うほどの多さである。
後でわかったが、外国人捕虜たちは常磐炭鉱で働かされていたという。
人が集まればそれだけで商売は成り立つ。
帰る兵隊になにかを売ろうとする者や物乞いする者が出てきた。
必然的に地守りをするやくざが出てきて、浜に一定の法則を作る。
祖父の配下に真柄のケンという威勢のいい漁師がいて、喧嘩とバクチでいつも仲間と事を起こしていたので、知らない間に一匹狼になってしまった。
背中には上り龍のくりからもんもん、汐焼けした肌が黒くぬめぬめに光っているケンが、
「コラ、帰れ」
と竹棒など振りまわしているうちに、浜は真柄のケンの私有地のようになってしまい、米兵はそんなケンをなにかと重宝に使っていた。
漁師と子供以外一歩たりとも浜には人を入れないのである。
とりわけ、わたしなどはケンに守られたお姫さまのようなものである。
祖父の配下にいたという関係もあるが、背中のいれずみをきれいだねえとほめると、ひどくうれしそうだった。
ケンのそばには誰もこわがってよって行かないから、平気でよって行ったわたしはいつもなにかと面倒をみてもらえるのだ。

ピシッと軍服できめている米兵の間をやたら派手な半纏姿の真柄のケンが歩く、洋モクをプカプカふかしながら……。

わたし達は、ガリバーの国にまぎれこんだ小人のような存在であった。

何もかもめずらしく、なにもかも興味があった。

どうしてあんなに目が青いのだろう、髪の毛の色がこうも違うのはどうしたものだろう、真っ黒になるにはなんで身体を染めるのだろう、なにしろなんでこうも大きいのだろう……、次から次に考える。

「神さんがおもしろおかしく楽しんで、あんな足長を勝手に作ったんだべよ」

ドラム罐をかまどがわりにのせたアルミの大鍋には、朝の地曳きに引っかかった獲物が投げこまれている。

ぐつぐつと煮たての蟹をほうばりながら、真柄のケンはいう。

わたし達は、神さまが人間をこんなにも作れるのだろうか、と不思議に思うが、すぐ納得してしまう。

「だども、作りすぎて疲れたんだべよ神さんも。ちっとば、人ば減らそうとしたのと違うか、ドンパチやって」

真柄のケンはみなに嫌われていたが、わたし達子供にとっては話の先生だった。いや、まだ知らない大人の世界の語り部だった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com